埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

Consideration Concerning Factor to Bring University Student's Inactive Studies : Based on Comparison Report by Two Universities

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 豊島, 雅和
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/898

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

大学生の学業不振をもたらす要因に関する考察
― 2大学での勉学意識に関する比較調査報告をもとにして ―

Consideration Concerning Factor to Bring University Student's Inactive Studies:
Based on Comparison Report by Two Universities

豊　島　雅　和
TOYOSHIMA, Masakazu

第1章　はじめに

本稿は、大学生の学業不振をもたらす要因を探ることをねらいとするものである。経済・商学系を対象とした大学生の勉学の現状、特に学習意欲との関係、及び学業不振者との関係に注目して考察した筆者の研究の続編に相当する。前研究の後のアンケート調査による具体的データをもとに、考察を加えていく。

まず第2章では、問題の分析のための考え方を提示し、本調査での具体的目標を明らかにする。第3章では、2つの大学での学生達の個別データをもとに調査結果を示す。第4章では、調査結果全般の意味するところを検討し、理解度、学習態度、努力との関連に焦点を当て考察する。付表にて、使用した調査票を示す。

第2章　分析の視角

大学改革や大学生の学力低下に関連した教育変動を見定める研究は1990年代から、教育社会学を中心として盛んになった。社会階層との関連を探る実証研究も多くなっている（文献1～5など）。一方、大学生の学業に対する考え方など、その実像に迫る今一歩踏み込んだ調査や分析、関連した議論は、必ずしも多くはない。

本稿では、それらの先行研究を踏まえた上で、学生の勉学行動と教員の関係の枠組みを明らかにしたい。教育は、多面的、複合的に絡む複雑なシステムといえる。そのシステムをとらえる枠組みは前稿（豊島・2005A）と基本的に同じである。

システムの主要な構成要素である大学生の学習時間や理解度と意欲は、それぞれどのように関連するのだろうか。多様化している彼らの勉学意識を、次の4つの側面から捉えることにする。

まず第1に、全般的に授業を理解できているかという理解度である。第2には、学ぶために必要な学習行動を伴っているかという観点である。第3は、それらを踏まえ、現状の授業をどのように評価しているかである。第4には、「授業の方法」は、どのような形が好ましいと考えるかである。

その意識の対象は、各教員の実施する演習、実習などを含む広義の「講義」の全体である。動機づけ理論によると、動機づけは内発的要

キーワード：学業不振、学習意欲
Key words ：Inactive studies, Greediness for learning

因と外発的要因の２つのカテゴリーに分けられる。学生にとり、講義を受ける動機づけの一つは誇り、向上心、関心のような内発的要因、もう一つは教員からの成績評価、卒業のための単位取得などの外発的要因である。その両要因と密接に連して学習意欲がある。学習意欲に大きな影響を与えるのが講義の理解度であり、満足度につながる。講義の中で教える内容じたい、および教材は重要な要素である。しかし、それぞれの分野の特性もあるので、講義の内容の差異には深入りせず、今回は一定と考える。

次に、新たに加えた視点について述べる。学校システムは、教員個人の資質や、学校の評価システムなどとも密接に関連しているだろう。その背後に大学の教育理念があると考える。

ここで、調査票において質問をする背景を明らかにしておく。あえて問うということは、何らかの違いがそこに発生しているのではないかという研究者の発想が潜んでいる。

この間の、学業不振学生とのコーチングや、カウンセリング的な関わり（豊島・2005Ｂ、2006）を通して、彼らは「適切な勉学や課題解決のための方法を知らないのではないか」、さらに「不明な点を、誰に聞くでもなく放置したままにして、独自の判断をしてしまうのではないか」という感を強くした。

各講義は、教員の側の言葉足らず、あるいはそのときの学生の側の状況によって、例え理解力の高い学生にとっても、理解できないことは十分にありえる。その時の学生の適切な態度選択によって、後の内容理解は大きく変化すると考えられる。これは、個々の学生の理解力や意欲とは別次元の学習態度の問題である。その状況を踏まえて、意欲や満足度ではなく、学習態度にも焦点をあてる。学習態度は、努力に対する各自の考え方とも密接に関連しているはずである。

不明点発生初期に適切な対処ができれば、あるいは、まわりの支援があれば、解決に至り、問題を食い止められる可能性が高まるだろう。学業不振に陥る学生は、自ら支援を要請せず、また支援システムの存在を知らずに、その積み重ねで、ますます事態が悪化するという悪循環があるのではないか。不明点放置は、その引き金になっていないか。そして、不明点を放置しておく学生の比率は、このところ増加しているのではないかという直感がある。学業の不明点に限らず、その相談先として、教員や親が選択される率は、決して高くはない[1]現実がある。

調査の具体的な目標は２つある。「不明点の放置」と「学習態度」、「理解度」、「学習意欲」は連動しているかどうか、不明点放置があるとすれば、その比率はどのくらいかを具体的事例に即したデータをもとに検証しようとするのが第１の目標である。

また、比較する対象によって結果に差が出るとしたら、どのようなことが考えられるか考察することが第２の目標である。

武内調査（武内・2004）は、大学生の勉学意識に対する著名な研究である。その対象とした12大学の素データから大学授業の授業全般に対する満足度をグラフにしたものが図１である。

この例でのＡとＢのように、各大学間に大きくばらつきがある。したがって、代表値のみで捉える議論は適切ではないと考えられる。

政府は「努力した人が報われる社会」を目指すべき社会としている。若者、その中で最

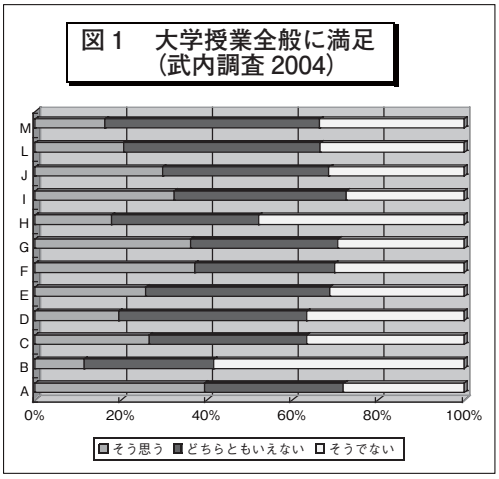


図１　大学授業全般に満足（武内調査 2004）

近の大学生は、努力をどのように考えているのだろうか。そのことが、将来の社会のみならず学生各自の直近の学習行動にどう影響するかという観点まで、踏み込んで認識しておきたい。そうすれば、一過性のアンケート結果として表面的な理解で終わってしまうことは避けられる。

第３章　２大学での調査結果と比較

3.1　簡易版調査票

1990年代初めに、企業において顧客満足度が注目され、大企業を中心に評価システムの一つとして導入され、定着してきた。大学においても、類似の観点にて学生参加による教育改革が見られるようになった。慶應義塾大学ＳＦＣで実施された授業調査の事例研究報告は、その先駆けである。

大学入試センターによる「大学生の学習意欲と学力低下に関する実証的研究」（柳井・2006）は、大学生の学習意欲・学力低下などの実態をとらえる最新のデータを伴った調査研究である。調査内容は多面的で多岐にわたる。その中で今回の関心事である「意欲」や「勉学態度」に関して、今回の枠組みに適合する設問を拾い出した。質問表の設問や回答の選択肢などは、大学入試センターの調査結果との互換性を維持するため同一表現を採用した。また、回答する学生にも負担をかけずに、若干の追加設問を加え、さらなる情報を獲得できるように配慮を加えた。その上で、管理が容易なように表裏印刷可能な一枚でコンパクトな形式にした調査票が、付表である。

多くの教員は学生の学力に合わせ、理解できるような講義をしていると考えられる。とするならば、理解度は基本的な尺度とみなせる。Ｑ１では、全体的な講義の理解度の他に、誇り、意欲などについての考え方を求めている。

学生個人の大学の勉学態度に対する当てはまり具合をＱ２で問うている。追加した質問は、大学生活全般についての満足度、大学の講義に対する満足度と、努力に対する考え方である。また、講義での不明点解決法の５つの選択肢をあげ、そのいずれかを選択させる。大学入試センターでの設問は、不明点の解決法として、「そのまま放置しておく」ということは想定していないようである。本稿では、教員、友人に尋ねる、自分で調べる以外の選択肢として、「その他の方法」、及び「そのまま何もしない」をつけ加えた。

講義の満足度は、内容と方法を含めた総合的なものである。講義では、教員の指定した予習や復習のためのレポートや宿題の期限を守る、指定したとおり学習することなどが期待される。一般的な指標のひとつは予復習に費やす学習時間である。学習への取り組みの前向き度として学習態度の特性値として考える。関連して、Ｑ３はその学習時間の他に、大学での出席率である。高校時代と比べた勉強時間の比較のための質問も追加した。

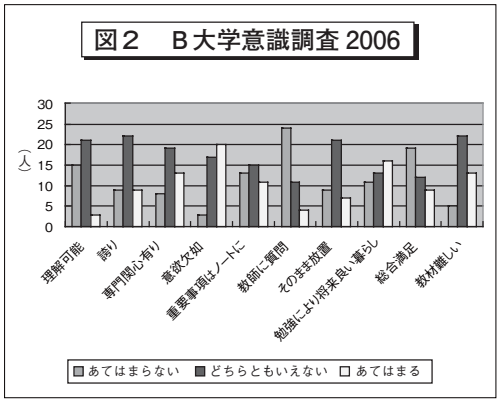
また、講義を選択するにあたり、学生達の選好の考え方をＱ４で見る。講義全般を想定した学習行動、どのような考えをするかである。追加質問として、「本当の勉強とは」と、「勉学と将来の良い暮らしの関係」についての考え方について２問を追加した。努力と将来に関する設問は、ＮＨＫ放送文化研究所などの類似調査で調査対象を変え、実施されている。必要に応じて、それらと比較は可能である。

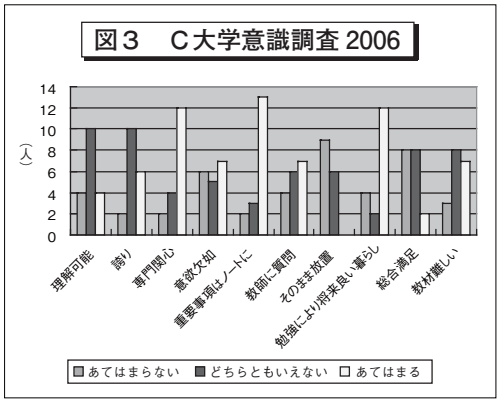
学生が積極的に取り組めると思う講義形式を選択してもらう設問がＱ５である。ここでも、選択肢以外のその他の記入余地を追加した。

3.2　調査の結果

以下、Ｂ大学[2]とＣ大学での調査と比較しつつ結果を報告する（図１で示したＡ、Ｂ、Ｃ等とは異なる）。示された調査結果は比較をすることにより、特異なものかどうかを判断できる場合がある。全国平均との差異に関する議論は、参考文献（豊島･2005Ｂ、柳井･2003）に譲り、この２つの大学の属性を明らかにしておく。Ｂ大学は、経済商学系を扱う専門分野で、中規模の地方私立大学である。Ｃ大学は人文社会科学系の２学部をもつ首都圏の小規模な私立大学である。今回比較の対象の学部の専門分野は若干異なるものの、大学入試センターでの分類では経済・商学系に相当する分野である。この調査は、筆者が担当した講義の受講生を対象に、ともに2006年４月に初回講義の始まる前に実施した。自己記入方式の学生の主観的評価による意識調査である。

Ｃ大学においては２クラス分を合計した18、Ｂ大学では１クラス分の40のデータが、結果





として入手できた。図２がＢ大学、図３はＣ大学のデータで、質問表のＱ1，Ｑ2，Ｑ４の中から、理解度の他、意欲面、勉学態度、価値的側面など、計10項目を棒グラフとして分布を表したものである。

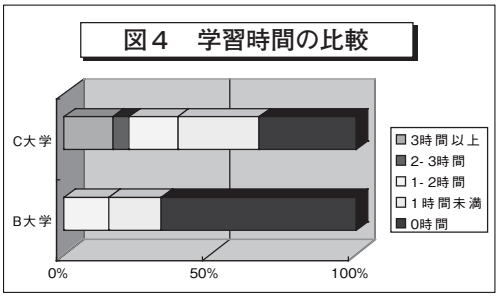
Ｂ大学では大学の講義をほぼ理解できる比率は８％、理解できないとする比率は38％である。Ｃ大学での全般的な大学の講義を理解できる人とできない比率は22％で同比率である。専門分野を学ぶ「誇り」も同様だが、特に専門分野への関心は、Ｃ大学では67％と高い。学習意欲が欠如していると自分自身で感じている率は、Ｂ大学では50％、Ｃ大学で39％である。

次は学習態度である。「板書されないこと

でも重要と思うことはノートにとる」の比率は、C大学で72%であるが、B大学は、28%[3]である。わからないことを教員に質問をする比率にいたっては、B大学で10%、C大学で39%と、こちらも差がある。その他の調査項目は、後に必要に応じて参照する。

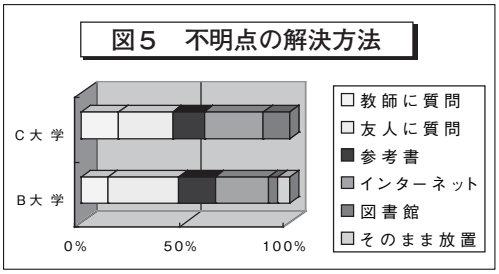
総合的満足の率は、B大学では低く、C大学においても決して高いわけではないことがわかる。

授業以外の自宅での学習時間の比率を示したグラフが図4である。



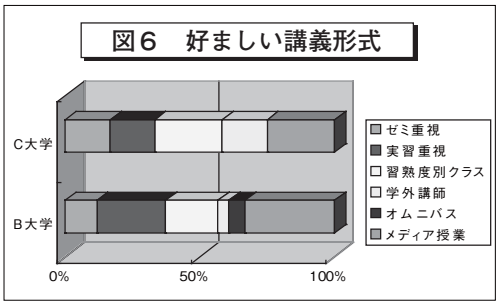
全く勉強しないとする学生の比率はB大学では6割強である。2時間以上の学習をする学生はなく、C大学と比べると全般的に低調である。

次に、講義などの不明な点の解決方法である。回答は複数回答で「あてはまる」とされた項目の比率を示したものである。その比較したものが図5である。



C大学では教員に質問、B大学では友人に質問の率が比較的高い。今回の論点の一つである不明点をそのまま放置するとした数は、この調査ではC大学には存在しなかった[4]。B大学では人数的には7名で、全体の構成比率は18%である。この点に関しては、次節にてあらためて論ずる。

また、図6は、好ましいと思う講義の形式の比較グラフである。



B大学では実習やメディアを駆使した授業への評価が高いが、C大学ではゼミナールや学外講師の支持が高いことが特徴的である。求めているものが、それぞれの大学の学生で相違している。

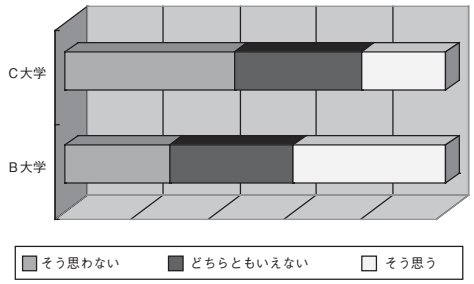
今までの比較を通してみると、C大学はB大学と比べると、専門科目に対する意識は高く、学習態度も望ましいと考えられる。

図7は、「努力は報われる」という考え方を比較したグラフである。

「努力」は、大学でのコンテクストとして具体的な勉強に、「報われる」を良い就職先を視野に入れた将来の良い暮らしと対応させて考える。「そう思う」比率は、B大学は4割でC大学は3割弱である。

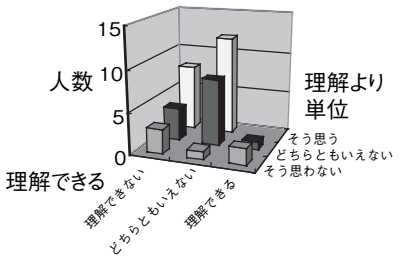
講義が良く理解できない学生にとって、たとえ学びたいという内発的要因は働かなくて

図７　勉強により良い暮らしができる



も、また就職先も期待しないということであっても、「大学の卒業」は魅力なようである。卒業のための一里塚である単位取得は、その際の外発的要因である。その目的のために、やむなく勉強することは大いにありうる。そうなると、受講科目を理解すること以上に、単位を取得することは、優先される可能性がある。この単位取得と理解の程度のバランスに関して、Ｂ大学を例に検証した２変数クロス集計グラフが図８である。

図８　Ｂ大学講義の理解と単位



講義を理解できる学生は、理解を重視するのは自然である。中立の学生は単位重視の傾向が強い。講義を理解できない学生で、理解を重視している学生が少なからず存在していることに教師は留意する必要がある。

3.3　不明点を放置する層の分析

今回のデータの中で、不明点を放置する学生はＢ大学に７名存在した。これは貴重なデータである。学業不振になる可能性のある予備軍は、そもそも、アンケート調査時に出席していないことも考えられるからである。

その不明点を放置する群と、サンプル母集団といずれかの項目で何らかの差異が存在しないか、Ｂ大学のデータを中心とし、その７名を抜き出した結果をもとに検討を加えた。

その７名についての講義の理解度は「理解できない」は４名、「どちらともいえない」が３名である。学習時間は「１時間未満」の１人を除いて学習時間は無い。疑問点を教員に質問は、「どちらともいえない」が１名で、それ以外は「あてはまらない」という結果で、不明点放置の積み重ねの状態に近い。また意欲不足を感じる学生は４名、どちらともいえないが２名、意欲不足を感じないが１名である。これらの結果から、理解度、学習態度、及び意欲は、ほぼ連動しているように思える。

さらに考え方と努力との関係を見る。不明点放置の有無と、勉強と良い暮らしをもたらすという考え方との関係を示したB大学での結果を図９に示す。

図９　「不明点を放置する」と「努力は報われる」

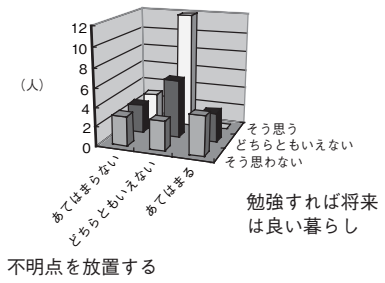


図７での傾向はB大学では、C大学よりも

努力は報われると考える割合が相対的に多かった。しかし今回の７名は、誰一人、勉強すれば、将来はよい暮らしができるとは思っていない。一方、不明点を放置するからといって、全員が授業内容の理解を単位取得より優先しているわけではない。７名中の１名であるので、参考データでしかないが、それでも価値ある人間のデータとして尊重されなければならない。

第４章　考　　察

4.1　具体的対策に向けて

前章で見てきたデータから一般的な学生のプロファイルを推測するならば、「勉強しても将来は変わらない。関心の高くない分野の不明点を解決したところで、なんら良いことはない、それなら無理もせず楽に、たとえ講義がわからなくとも単位を揃えて大学卒業を目指す」ということになりそうである。

そのプロファイルを形作る学習意欲、理解度、努力は、抽象的概念である。さらに、相互に関連しているため、どちらが原因で、どちらが結果とは特定できない。その背後に、別の根本原因が潜んでいる疑似相関とも考えられる。対策としての「意欲を持て」、「勉強時間を増やせ」「理解度を上げるための努力をせよ」という結果にのみ焦点を当てた指導は精神論でしかない。具体的改善活動に結びつけるためには、行動がイメージしやすくなければならない。理解度、学習意欲などに影響する一つの要因になりうる「不明点放置」をやめ、解明に努めよという指示は、具体的である。そこで、「不明点の放置」をなくすことが、学業不振を少なくさせる具体的対策のひとつであると考えたい。あわせて、努力や単位に対する彼らの考え方も、認識しておきたい。

4.2　違いをもたらす要因

次に、図２から図７のグラフで見たような調査結果の差をもたらす要因としての制御変数は、どこにあるのか掘り下げたい。その相違をいかに解釈するかは、比較対象の大学の属性のどの側面に注目するかで変わる。その要因としては、該当学生群の理解力、意欲、学習態度、家庭を含む外部環境、教員個人の力量、教育システムなどが考えられる。現時点では、以下のような荒削りな議論しかできないが、今後の研究の出発点とするため、順を追って検討していくことにする。

まずは学生の属性による影響から検討する。その代表的特性の一つである入学時の学力的側面を理解力に対応すると考えるならば、Ｂ大学とＣ大学は、ほぼ同レベルといえる[5]。

学力以外の属性による影響として意欲や学習態度が考えられる。そのひとつの評価尺度に学習時間がある。予習復習を課さない講義科目もあろうし、授業中にだけ集中してくれれば良いという教員もあるので、自宅での学習時間だけで判断するのは片手落ちかもしれない。そのような場合でも、できるだけ授業に出席し、少なくとも授業時間中は集中して聞くことが期待される。理解力は影響するだろうし、重要なこととそうでないことの区別は前提としてある。重要なことはノートに書き留めるなどは期待される場合も多い。この学習態度にはＢ大学とＣ大学では大きな差があった。

学生のサブシステムでない分野で影響を与えると考えられる要因は、各学校の教育システムである。教員個人の力量による差異はどうかという疑問がわく。先の調査で、学生に

よる講義の理解度に差があった。しかし、Ｂ大学教員が難しいことを教えている、教材が難しい、教え方が著しく劣るなどとは考えにくい。それぞれの大学の講義要綱や授業アンケート調査結果などと照らし合わせる総合的に見るならば各大学の担当教員に依存した属性による際立った差はない[6]と推察される。

Ｃ大学は、掲げる教育理念の実現のための一形態として、少人数による教育を謳っているのが特徴である。平均のゼミの担当学生比率は、Ｃ大学は約10名、一方、Ｂ大学では約18名である。この教育理念実現のための教育システムの差が、今回の調査結果の差になっている可能性がある。

結果の差異に対するもう一つの解釈は、外部環境である。該当大学の集団としての学生の属性の一つとしても考えられる首都圏の大学と、もう一つは地方大学という空間的相違に帰するものである。首都圏の学生であれば、補習のための機会や、大学における選択肢を含めた各種の情報などは豊富であり、刺激的な世界にいる。一方、地方の学生は、ある意味では、のんびりと、また素直に暮らしている側面もある。そのような外部環境により影響される意識、及びそれに伴った行動が調査結果に反映されているとも考えられる。

4.3　データの解釈

今回、学業不振をもたらす要因を理解するための手がかりを、データの比較により求めた。比較を試みる際は、まずは時空の観点を整理して理解することが必要である。

時間軸から考えると、最近の大学生はたとえ数年前の大学生といえども異なった属性を所持している可能性が高い。この間の外部環境の変化は著しいため、比較は意味をなさないこともある。空間的に国内の大学に限定したとしても、多種多様な大学があり、これを一概に扱うことはできない。そこで、時間軸、あるいは空間軸のいずれかを固定し、微小な差を観察する。すると、その中での学生の持つ意識は、なだらかな変化を伴う連続的なものとみなすことができるだろう。今回の調査は、時間軸固定で空間による変化を見ることに相当している。

そこでは、平均的な大学生像としての共通する一般的傾向とともに、多様化しているそれぞれの大学での学生の偏差が発見できるはずである。

昨今は二極化の実証研究（例えば、山田2004、三浦2005など）も多くなり、異論は存在するものの、その現象は多くの人に認知されてきている。従来の中流が、その中で上位層と下位層に二極化しているとするならば、上位層をさらに伸ばすことができない。それだけでなく、下位層にとっても救われない結果になりかねない。その各大学特有な状況に即した解答となる特殊解は、統計的な処理の中では例外として扱われ、切り捨てられる場合も少なくない。二極化していると解するならば、各層別の解と、サンプルの偏差が混在しあい、調査結果はでていることになる。

さらに、事実と回答の食い違い[注3]にも解釈を加えておく必要がある。考えられることは、教員と学生間の重要なことについての認識の差である。また、学生はあるべき姿の「建前」に基づいたアンケート回答をしている可能性が高いことも確認できた。勉強時間にしろ、問題解決の方法に関しても、その実態は、安易な方向に流れているのではないかと危惧される。このような現実を踏まえると、回答の細かな数字まで追求するのは、あまり意味を

なさないだろう。下位層の動きは数的には少数派かもしれないが、今後の傾向を先取りした先行指標として捉えることが妥当と考えられる。

4.4　不明点解決のための努力

次に、学業と努力との関係について考えたい。図６で示したような学生にとって好ましい授業方式を教員が採用することが常に「教育的であるか」というと、必ずしもそうとばかりもいえない。学生の不明点解決法の例においても、自分の頭で考えることなしに、ただ答えだけを教員に求めることは適切でない場合も少なくないだろう。

努力の量が少なくとも、学問の本質が容易に理解できれば望ましいと、多くの人は考える。昨今、大学をはじめとする教育は、よりわかりやすく、ある意味では「努力なしに」理解できるようにする傾向にあるのではないだろうか。プレゼンテーション・ツールを活用し、各種メディア技術を駆使して、視覚的に理解できる試みは、理解の一助になる。この支持は多くの場合に高い。一方、これとて「教育的であるか」というと、ノートをとりにくい、じっくりと考えることを阻害するなどの弊害もあり、結論は留保せざるを得ない。

学習者、各自の持つ学習スタイルは、聴覚系、視覚系、言語感覚系、触覚系など様々である。テレビやビデオに深くなじんだ世代である昨今の学生は、文字離れが顕著で視覚系優位の理解型が多いようである。メディア中心の世界に慣れ、必ずしも努力しなくとも理解できることが重なれば、その流れに逆らうことは容易ではない。努力して、文字中心の難解な書物を読破しようとする誘因は、なかなか働かないだろう。

図７の「勉学により将来は良い暮らし」は、かつては多くの人が信じていたものの、今は揺らいでいる。努力に対する考えと勉強時間の長さなどとの関係の提示は省略するが、結論としては、相関はなかった。

勉強したほうが良いと頭でわかっていたとしても、実際の行動は必ずしも、ついていかないこともある。また逆に、勉強しても将来は変わらないと思っても、学習意欲がわかなくとも、単位取得のために勉強せざるをえないという「ねじれ」もあるためと考えられる。

学習により将来は良い暮らしがあるとの考えは、３割近くの学生は支持しない結果である。今直面している学習課題に対して努力して対処すること、「学び」への動機付けが、かつてと比較すると弱くなっている。この現実に対して、どのように対処すべきなのか、決定打は見出せない。

難しいのは、不明な点の解決法ひとつとっても、そのあるべき姿を一概には特定できないことである。不明点を直ちに追求しなくとも、時間が経過し、全体の体系が見えて、あるいは突然何かとの関連で、見通しが良くなり、霧が晴れたように理解できるという場合も少なくない。あくまで懸念されるのは、不明な点が積み重なり、それが習慣となり、学業不適応につながることに限定しておこう。学生が受け入れるかどうかは別として、不明点は放置せずに努力して理解するようにと、教員の側は指示せざるをえない。

今回の調査票の課題の一つは、不明点の解決法での選んだ方法で解決に至ったか問うところまで踏み込んではいないことである。また、「インターネットを使って不明点を解決する」実態とはどのようなものか、どこまでするのか。また、「友人に尋ねる」というのは

その友人がどの程度理解しているのか、具体的解決のための会話まであるのか。また友人がその場にいないときはどうするか、どこまで解決がつくのかなど、さらに一歩、踏み込んで問う必要がある。その場合でも、先に触れたように、学生は建前で回答している可能性の高いことを留意しておく必要がある。その追跡結果により、明確な結論が得られる可能性がある。

第５章　結　　論

今回のＢ、Ｃ大学の比較調査は、データ数は十分とはいえないし、サンプルにも偏りのある可能性も否定できない。Ｂ、Ｃ大学を選択したことに関しても恣意的である。したがって、統計的な真偽を語ることはできない。学業不振をもたらす要因に関する一般論を語ることはとうていできないが、この２大学での調査を通して「不明点を放置」する学生の考えをあらわす一側面のデータを提示できた。

高等教育の裾野の広がりにより、従来は当然と考えられていた前提は次々と崩れかけている。今回のデータから明確に結論できることは、サンプルの学生が異なれば、調査結果も大きく異なるというあたりまえのことである。学生は一人ひとり異なり、何曜日の何時限目のある特定クラスは、偶然の重なり合いである。調査データというものは、調べた範囲に関してのみ真実な、時空を限定した一側面での特殊解でしかない。しかし、特殊解は特定のコンテクストにおいては大変重要である。該当の特定クラスでの集団の特性を担当する教員としては理解したい。付表の調査票は、特殊なコンテクストの現状把握のため、役立つものと信ずる。

一方、学生は自分自身を、特定クラスの調査結果の平均的学生像として扱われるのではなく、他者と異なる自分として尊重してほしいという要求がある。個人としての顔の見える一人ひとりに注目しなければ、多様化した学生の行動性向を理解することは困難である。

このような学生の多様な要求に個別に具体的に対処していくことは、教育効率や生産性とは相容れない側面もあるので、経営的視点では、適度なバランスも肝心である。

なお、教育の特性を考えると、今回のような比較調査データを、今後も更に集積したとしても、それは特殊解でしかない。いくつかの手がかりは得られたものの、特殊解の積み重ねで真実に近づくということは、永遠になさそうである。したがって、次回は角度を変え、具体的行動に結びつく「教育方法」に焦点をあてた研究へと転換していきたい。

注

1　「全国大学生活協同組合連合会、2004」によると、学生の相談対象の１％未満が教員である。

2　本稿は、個別の大学の評論をすることが目的ではないので、大学名を特定せずＡ、Ｂ、Ｃ大学のような表記とした。

3　B大学の該当クラスにて、毎週、各自のノート提出を求めた。その内容を見ると、重要なことまでノートしている比率は、かなり甘く判断しても１割弱、板書したままノートしているのが約６割で、残り３割は板書を部分的にのみノートをしていた。このようにアンケート結果の数値と、筆者の教員として評価結果の実態は、かなり異なるが、社会調査において質問者の期待する回答にバイアスがかかることは知られている。

4　2006年９月の48名の別のクラスのＣ大学受講生での調査によると、５名の該当者が存在した。

5　旺文社によると、対象学部の偏差値は、Ｂ大学は40、Ｃ大学は42である（2005年）。サンプルが２

大学であるので、一般論は議論できない。

6　大学教育は各教員に大きくゆだねられることが多い。その結果、教育の品質にばらつきが発生することは避けられない。しかし、いずれの大学における教員集団においても、同様な分布があるのではないかと想定している。それが真実かは検証の必要な課題のひとつである。

参考文献

［1］苅谷剛彦、「階層化日本と教育危機」、有信高文社、2001

［2］苅谷剛彦、「教育改革の幻想」、筑摩書房、2002

［3］教育社会学研究　第55集　大学改革の社会学、日本教育社会学会、1994

［4］教育社会学研究　第70集　特集　1990年代教育変動の諸相、日本教育社会学会、2002

［5］教育社会学研究　第76集　特集　後期青年期の現在、日本教育社会学会、2005

［6］全国大学生活協同組合連合会、Campus Life Data 2003-2004、全国大学生活協同組合連合会、2004

［7］武内清他、「12大学･学生調査」、2003年度上智大学・学内共同研究報告書、2004

［8］豊島雅和、「経済・商学系大学教育の現状に対する考察」、浜松大学研究論集　第17巻２号、2004

［9］豊島雅和、「大学生の勉学意欲の現状に関する比較調査報告」、浜松大学研究論集　第18巻１号、2005Ａ

［10］豊島雅和、「学業不振学生に対するコーチングの活用可能性に関する事例研究」、浜松大学研究論集、第18巻２号、2005Ｂ

［11］豊島雅和・山本健一、「学業不振学生に対するカウンセリングに関する事例研究」、浜松大学研究論集、第19巻１号、2006

［12］三浦展、「下流社会」、光文社，2005

［13］柳井晴夫他、「大学生の学習意欲に関する調査研究」、大学入試センター研究紀要、2003

［14］柳井晴夫他、「大学生の学習意欲と学力低下に関する実証研究」、日本学術振興会科研費補助金研究成果報告書、2006

［15］山田昌弘、「希望格差社会」、筑摩書房、2004

付表

****

Ｑ１　大学入学、職業観などについての考え方に対する質問です。
現在在籍している大学・学部に入学するにあたって、以下のことをどの程度重視したかを三段階で評定してマーク（○）をしてください

（１．重視しなかった　２．どちらともいえない　３．重視した）　回答欄

１．自分の学力に合っている	1/2/3
２．自分の興味・関心をいかせる	1/2/3
３．高校時代の得意科目をいかせる	1/2/3
４．希望する職業につくことができる	1/2/3
５．親や教員に薦められた	1/2/3
６．大学卒の学歴が欲しい	1/2/3
７．自分が必要とする資格を取得できる	1/2/3
８．専門的知識や技術を身につけることができる	1/2/3
９．家庭の経済状況にあっている	1/2/3
10．その他（　　）	

以下の質問のそれぞれに（１：あてはまらない　２：どちらともいえない　３：あてはまる）で回答してください。

所属する大学の専門分野（学部・学科）への適正度

１．自分の性格にあっている	1/2/3
２．自分の興味・関心にあっている	1/2/3
３．自分の能力をいかすことができる	1/2/3
４．高校時代の得意科目をいかすことができる	1/2/3
５．希望する職業につくことができる	1/2/3
６．自分の求めている生き方ができる	1/2/3
７．現在の専門を学んでいることを誇りに思う	1/2/3
８．新しく専門を学びなおせるとしても、やはり現在の専門を選ぶ	1/2/3

職業観など

１．収入が少なくても興味がもてる仕事より､興味がもてなくても収入の多い仕事を選びたい	1/2/3
２．収入や知名度などよりも、社会への貢献性を重視して職業を選びたい	1/2/3
３．大学を卒業してから、就きたいと考えている職業が決まっている	1/2/3
４．大学で学んだことを生かせる職業を選びたい	1/2/3
５．学力より興味や・関心を重視して進路を決めるべきだ	1/2/3
６．やりたい仕事がみつかるまでは就職しなくても良い	1/2/3
７．これからの社会は学歴よりも実力だと思う	1/2/3
８．努力をすれば、希望に沿った進路が実現できると思う	1/2/3
９．就きたい仕事に必要な知識を得るために、大学院に進学したい	1/2/3
10．入学試験は人生を左右する重大事だと思う	1/2/3
11．偏差値の高い大学は良い大学だ	1/2/3

Ｑ２　大学での勉学に対する質問です。各項目があなた自身にどれくらいあてはまるかを三段階（１：あまりあてはまらない　２：どちらともいえない　３：だいたいあてはまる）で回答してください。
特定の講義でなく、現在受講している講義全部をイメージして回答してください。

大学生活全般

１　現在の大学生活に満足している	1/2/3
２　現在の大学の講義全般に満足している	1/2/3
３　現在の専門分野に関心がある	1/2/3

講義全般について

１次回の講義内容に相当する部分は、前もって予習してから講義に臨む	1/2/3
２講義の内容をほぼ理解することができる	1/2/3
３黒板に記載されない教員の話も、大事だと思う点はノートに取る	1/2/3
４講義に関連した参考資料や文献はなるべく読む	1/2/3
５講義を理解するために、高校で履修しておけば良かったと思う科目がある	1/2/3

（裏に続く）

不明な点の解決方法について
1．講義中や講義後の休み時間などに、教員に直接質問する　1/2/3
2．友人に質問して教えてもらう　1/2/3
3．下記の利用して自分で調べる
　参考書　1/2/3
　インターネット　1/2/3
　図書館　1/2/3
　その他（　　）
4．そのまま何もしない　1/2/3

Q 3　あなたの勉学の状況に対する質問です。講義への出席率はどれくらいですか
1．20%未満　1/2/3/4/5
2．20%-40%未満
3．40%-60%未満
4．60%-80%未満
5．80%以上

講義や実習以外での勉強時間は、一日平均何時間ですか
0　0時間　0/1/2/3/4
1　1時間未満
2　1時間以上2時間未満
3　2時間以上3時間未満
4　3時間以上

あなた自身にどれくらいあてはまるかを三段階（1：あまりあてはまらない　2：どちらともいえない　3：だいたいあてはまる）で回答してください。

1　高校時代よりも勉強している　1/2/3

Q 4　各項目についてのあなたの考え方を三段階（そう思わない　どちらともいえない　そう思う）で回答してください。特定の講義についてでなく、現在受講している講義全般を想定して回答してください
1．成績のつけかたが厳しかったり、課題の量が多かったりする講義は受講したくない　1/2/3
2．講義の内容が十分理解できなくても単位さえ取得できればよい　1/2/3
3．提出したレポートや課題は、添削して返却して欲しい　1/2/3
4．教員の講義方法に不満を感じる　1/2/3
5．講義で用いる教材（教科書・参考資料）は難しいものが多い　1/2/3
6．いま自分は学ぼうという意欲や気力が不足している　1/2/3
7．純粋な学問的興味を満たすだけで将来の仕事に役に立たない講義は受講したくない　1/2/3
8．一生懸命勉強すれば、将来良い暮らしができるようになる」　1/2/3
9．受験勉強は良い学校に行くためだけで、本当の勉強とはいえない　1/2/3

Q 5　自分が意欲的に取り組めると思う講義形式を以下の中から二つだけ選びそれぞれをマークしてください
1．少人数のゼミナール方式の講義
2．実験実習などを多く取り入れた講義
3．習熟度に応じた講義
4．学外の講師を招くなど社会とのつながりを重視した講義
5．複数の教員によるオムニバス形式の総合的な講義
6．メディア　（ビデオ・インターネット・衛星システムなど）を活用した講義

上記の2つの他に良いと思う講義形式について考えがあれば、それも記してください
（　　）

Q 6　その他、大学の講義について感じることや、この調査について何かあれば、具体的に書いてください

調査へのご協力どうもありがとうございました。

****